

白い歯、笑顔で艶舌な彼女だが、彼れが顔ににじみ出ている。

朝から彼女は何百人もの子供の相手をしてきたから。それがディズニーマウスに勤める者の宿命だ。ディズニーマウスの職員は日に何万もの相手をしなければならぬ。相手に子供にならなければならぬ大人はストレスがたまると、自分の子供ならまだしも、まったくの他人である。それに大人までもが幼児に返る。これは一種の野天の巨大な精神病院だ。しかし圧倒的な患者に対してカウンセラー(職員)は不足している。笑顔をつくりながら重荷で顔がゆがむ。この人工楽園に働く職員の手で、その種の「幼児回復症候群」患者は押しつけがましに「幼児カウシセラピー症候群」とも言うべき職業病が發生している。それはつきりしと見えてくる。

とくにあのミッキー・マウスのぬいぐるみを着てフロリダの休天下に行く小人に私はいたく同情する。このアメリカの偉大なディズニーマウスはニッポンにおいては単なる友人であるにすぎないが、ここアメリカにおいてはそれは友人であるとも神格を帯びた偶像である。歩み偶像の行くところ、人々は幼いころより自分の心の内に住まう神のイメージを目の当たりにしたかのように駆け寄り、群れなす。笑顔のミッキーは根気よく無数の幼児および幼児回復症候群患者の要求を受け入れ、一人一人を交歓するが人々は次から次へと無尽蔵はやつてくる。ミッキーが次の場所へ移動しはじめると人々は追いつけず、再びそこで黒山のたかりができる。残酷な熱狂だ。彼はエレファント・マンなのである。ミッキーの中の小人は彼自身が愛されているのではなく、毎日毎日飯面を愛されつづければならぬからだ。

私はディズニーマウスのエレファント・マンを眺めながら、アメリカ国民がなぜこのように子供っぽい飯面の偶像を他のいかなる生身の人間のスターにもまして愛するのかわからない謎に行き当たる。

たぶんその謎を解くにはこの多民族国家におけるスターと大衆との特殊な関係を考慮しなければならぬ。アメリカのスターは多様な人々が互いに共有する偶像たるべく宿命づけられており、ミッキーの場合もその基本條件を充分にクリアしているといえる。この面においてスターは限定された個人や生身や実像から遠ざかることによってこそより多くのファンを心を収束しようという変わったことが起こるのである。

その意味において、生身の個人や特定の人格さえも遠ざけたディズニーマウスの存在はアメリカにおいていったい何が多様な人々の心をあまねくとりえらるかという問題をよく示している。無個性がスターになれるというわけではない。その非人種、非個人の人形が偶像となるためには必然キヤラクターが必要とされるわけだが、ウォルト・ディズニーマウスは巧妙にもそれを子供心に訴えるチャイルド・マジックなものにした。ミッキー・マウスがアメリカにおいてスター・スターになりえた一つの条件はそこにある。なぜなら、あらゆる種類の民族の心と心の間を仕切る垣根を取り払い、お互いの心を通し合わせることをきめるものといえ、人間がとも共通の原感覚として所有している「子供の心」にはかならないからである。ミッキーの前ではあらゆる人種がかりそめの子供心で一体になれるのである。その意味において、ディズニーマウスはアメリカの商品や文化の象徴であり、二〇世紀においてアメリカ文化が他のいかなる国の文化にもまして、地球上の多様な民族の中に障害もなくあまねく浸透していったのは、そのようなアメリカの特殊条件があったからこそである。

ディズニーマウスの謎を解くうえで、私は個人的にもう一つ思い当たることがある。それはミッキーが「星」であるということだ。ヤツは言っておくが、あの「ドブネズミ」なのだ。

アメリカ人はなぜかドブネズミを大統領よりも、いかなる有名スターよりも有名にしてしまったのだ。世界にはそれよりもずっと明るくかわいし子供好きの動物が無数にいるのに、明い彼らがなぜこの最も不潔で暗い、最も人間から嫌われてきた動物を国民崇拝のアイドルに祭りあげたのかは理解に苦しむ。

しかしそれは鑑みるに、あるいはこういふこともかまないと秘かに思う。  
「こんなに人から嫌われる醜い動物でも、私たちがそれを愛することができるのです。」

平等と博愛と人権を国家精神としなければならぬこの国の宿命がネズミというシンボルを導きだしたのではない。そのことはもう一つのディズニーマウス・キヤラクターであり、スター・スターであるナルド・タック目をやれば、明瞭になるように思う。この動物も西欧文化によってつくられた動物ではない。ヨーロッパにおいては、それは醜いアヒルの子として仲間はずれにさされた異端だ。

「女の隣人を愛せ」

私の経験からすればアメリカ人はほど率直なディズニーマウスはいい。この聖書の言葉は多民族国家のアメリカにおいて、いかなる他のキリスト教国における人々にもまして実行に移されたし、また実行されなければならなかったのである。

人間がそれを醜く汚いと思ひ、内心嫌悪を感ずるものを受してこそ真実の博愛があり、そこにアメリカがある。マウスとタックの復讐は、やまやまアメリカの「キヤラクター」のころのモンタージュのように思える。そして、このアメリカの「キヤラクター」は、アメリカのTV番組の中で驚くほど多くの時間を費やして映し出される。あのアメリカやアジアのまるで汚れたネズミのように飢えて痔せられた黒い子らへのオマージュの中にも見られるのである。

アメリカ・ミッキー・マウスの暗黒するものに、さらに踏み込んでみよう。

西欧人と東洋人の持つネズミという小動物に対する感覚は、おそろしく異なるものがあるのではない。この小動物のいる場所は中世から近世にかけての数百年間西欧人にとって大変な東門だった。つまり、マウスこそはあのベストの媒介者だった。ヨーロッパの白人がアメリカ大陸にやってきた一七世紀、太陽は衰亡期にありベストはいぜん猛威をふるっていたのである。ヨーロッパの白人がヨーロッパから逃れて新大陸をめざしたきっかけの一つはベストではなかったのか。つまり、彼らの先祖の地、ヨーロッパでその人口の三分の一を死滅させたベストの媒介者であるこの恐るべき小悪魔、それは彼らにとってヨーロッパの暗い過去の生き証人であり、亡霊だ。

そのとんとんと暗く重い故郷から新しい天地を求めて新大陸に辿りついた彼らは、大陸にヨーロッパのイメージを築いた。ニュー・イングランド、ニュー・オルリンズ、ニュー・ヨーク、ニュー・ハンペンチャー……etc。彼らの初期の多くの街はヨーロッパのどこかの街にコピーを付けたものが多い。パリ・テキサスというのもある。いまでも彼らの深層意識にとてこの新大陸はヨーロッパの代替地である。新しい天地でもあらねばならなかった。彼らの移民時代の言葉が示すように、それは「バスタード(理想郷)」であり、そのバスタードという言葉の中にはどうやらユダヤ教からキリスト教にひきつがれた千年王国の夢が確実に投影している。

つまり、ここは楽園であらねばならぬ。

過去の悪夢、ベストは存在してはならないのだ。

彼らの中のある者、つまりウォルト・ディズニーマウスは、旧ヨーロッパと自らの新ヨーロッパを差別化するためかどうかは知らぬが、思ひもかけぬ大胆なアイデアを思いついた。彼らのD

NAはくつきりと組み込まれたあの厄のシンボル「ベスト・マウス」をだれにも危害を加えない礼儀正しい紳士に擬人化してしまつたのだ。

文明の中で、汚濁にまみれた動物を人間の位まで引き上げることは大変な冒険だ。暴挙に近い。しかしだれも文句を言わなかった。いや最初は何かが文句を言ったかもしれない。しかしアメリカの深層心理はそれを許し、歓迎した。アメリカはこのときをもってヨーロッパから独立宣言をしたと言えるだろう。劇面に立ち現われた一風変わったスターを國章として、もしかりに国家憲章の一部を塗り替えることのように語られよう。

「この千年王国では、世界で最も邪悪な、かのベスト・マウスは存在しない。それはばかりか、この新天地のマウスは神の傑である人間のようにふるまい、国民を笑いと幸福の渦中に投げ込んでくれるハリウッドの大喜劇スターのようであり、その明るさはサンベルトの太陽のごとくである」

マウスはだれもが親しめるように「ミッキー」に名づけられた。

さて、「ミッキー・マウス」という愛称を与えられたドブネズミは、あの神経質そうとながった顔やケジメで消されて、ふくらみ顔に描き変えられた。ヒゲが生えていつもピクピク動いている鼻は、サカサカの道化師のようなものになり、鼻の先は丸くなり、毒矢の先みたいな危険な牙は抜かれて、生まれたばかりの赤子みたいなミルク飲み人形の口に退化させられた。外形からはあのベスト・マウスの危険な面影はもうそこにはない。あとは表情だ。ちょうどあの古典的喜劇役者ボブ・ホップがアメリカの大衆と出合いながら目を吊り上げて満面に笑みをたたえた「ヤブアーニー・オール・ライト」と言ったような、そんな感じの表情が付け加えられた。

完璧である。アメリカにおいて人間よりも明るくなったネズミは聖なる人間の殺してきて罪をつくらぬように、今度は人間に救いを与える側にも変わった。

ミッキーは生まれて六十年来、恐ろしいほど明るいまわりのワン・キヤラクターのままで。しゃべる言葉もたった一つ。

「やあ、元気かい！」

「やあ、元気かい！」

「やあ、元気かい！」

「やあ、元気かい！」

「やあ、病気がい！」、「やあ、病気がい！」、「やあ、病気がい！」。先祖の地でそう言いつづけたネズミは、まったく逆の言葉を吐くようになる。

ミッキーはずつとそう言いつづけて、めでたく今日に至っている。そして明日もまた、永遠に笑顔と絶えずとなく、みんなの前でそう言いつづけるだろう。かつて東洋の人間が仏像のアルカイック・スマイルを見て心の平安をもたされたように、アメリカ人はミッキーのケタイニク・スマイルによって子供みたいなカッピンな気分になるのだ。そして、このアメリカを存続の地とするプロステティック製張り紙の偶像は、かつて仏像がインドからやってきて他国に伝播したように、二〇世紀、世界の国々に流布し信者の増やしていき、ベスト・マウスの記憶のない東洋の処女たちは、何の抵抗もなく張り紙を見てひと目惚れした。アメリカにおいても、生まれたときからミッキーを見て育ったニュー・アメリカンたちのDNAから、ヨーロッパの暗い記憶は完全に駆逐された。

# アメリカ 藤原新也

情報センター出版局

